

---

# ぼくら の ヒミツ基地

野島美帆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼくらの ヒミツ基地

### 【Nコード】

N1863F

### 【作者名】

野島美帆

### 【あらすじ】

田舎の各学年一クラスしかない小学校に始めて転校生がやってきた！転校生の提案で秘密基地を作ること・・・少し懐かしさを感じる日常を描いた小説です。

## 第一話 「秘密基地」

高山 たかやま しゅん 旬 まあまあお金持ちで成績も優秀。口数が少なくって一部の女子には人気。

杉野 すぎの ひろやす 広康 あたしはヤスって読んで。力持ちだけどいざって時に頼りにならない。

そういうあたしは鮎川 あゆかわ ゆな 由奈どこにでもいそうな子。

・・・また同じクラス、同じ先生・・・もう5年生なのに何一つ変わらない。そんな時だった・・・彼が来たのは。

水谷 みずたに そうた 壮太。よろしくお願いします。」

それは、きつと学校始まって以来の初めての転入生だった。

ぼくらの

ヒミツ基地

第一話 「

秘密基地」

キーンコーンカーンコーン

「先生、さようなら。」

みんなで大声で挨拶をして、帰ろうとしていたあたしを先生は引き止めた。

「鮎川、水谷と一緒に帰ってやってくれないか？一人で帰らせるのは危険だ。」

「えっ！」

「由奈、遅いぞ!!」

校門でヤスと旬が待っていた。

「ごめん、ごめん。」

あたしは水谷君を連れて駆けていった。

「あれ? そいつ・・・」

ヤスが水谷君を指差した。

「この人だあれ?」

ヤスの影からひよつこりとせつちゃんが顔を出した。せつちゃんというのはヤスの弟で小学二年生。いつもヘルメットを何故か被り、ぶかぶかの服を着ている。本人は「すぐ成長するから」って言うけどなかなか背が伸びてない。本名は仙人<sup>せんとう</sup>。

「転入生で水谷 壮太っていうの。めんどくさいから壮太ね!」

「壮太壮太。」

せつちゃんが繰り返した。

「いきなり呼び捨て・・・」

旬が何か言っていたみたいだけど、あたしには聞こえなかった。というより聞く気がなかった。

「でさあこのまへのポケモンがさあ・・・」「そうそうあのシーン良かった。」

ぺちやくちやと喋りながら、まるで同じところを何回も通っているような一行に変わらない田んぼの風景をただひたすら歩いていた。

「・・・旬、壮太と何か話さないよ・・・ボソッ」

「やだ。」

即答。

「なんで?」

「めんどくさい。」

またも即答。

「もういいわよ！あたしが話しかけるから。」

そんなことを話しているうちに、やっと田んぼから林の風景に変わった。

「あのさ、壮太はどうしてこんな田舎に・・・」

あたしが言いかけた直後だった。壮太は立ち止まって林の方をぼんやりと見ていた。

「どうかした？林に何かいた？」

「・・・・・・・・。」

返事がない。

「僕ここでイノシシみたことある〜！かつこよかつた〜！！」

せつちゃんが手を上げていった。

「かつこよかつたって・・・イノシシでたら逃げましょうって先生言ってたじゃん。」

「すごく大きかったよ〜！！」

話を聞いてないんだからせつちゃんは・・・。

ザッザッザッ

つて・・・壮太、林に入ってるし！！！！

「ダメだよ、壮太！林は危険だから先生が入っちゃダメだって！

！！」

「・・・・・・・・。」

駄目だ。話を聞いてない。

「俺が連れ戻してきてやる〜！！」

ヤスが林の中に走っていった。

「ヤス〜！！」

どうしよう・・・ヤスも行っちゃった。

「あんちゃん待つて〜！！」

せつちゃんまで行ってしまった。

ザッ

旬も林に踏み込んだ。

「行かないのか？」

「……行くわよ！行けばいいんでしょ！！」

やけくそで林にがに股で入ってやった。

「蜘蛛の巣引つかかったしもうやだ！！……？」

ぽかーんと壮太たちが立ち止まり、何かを見つめていた。

「何やって……ん……んん？」

壮太たちの目線の先にはトラックがあつた。車体は色落ちが酷く、あちこち錆びれていた。タイヤもパンクして隙間から草が車体に絡みつくように生えていた。コンテナの上には、枯れ葉が積もっていた。窓ガラスにはまるで映画に出てきそうなほど見事な波紋状のヒビが入っており、今にでも割れそうだ。錆びの部分がただれ、とても不気味だ。

「なんでこんなところにトラックが……」

「あのさ……」

「？」

「コレ、俺たちの秘密基地にしようぜ！！」

さつきまで下ばかり向いて暗くて何も言葉を発しなかったのに……壮太があたしたちに初めて言ったのがそれだった。驚いた。こんなに大きい声が出せるなんて……いきなり顔を上げて……。そして、なにより……。こんなに楽しそうに笑うなんて思ってもみなかった。

「………はあ？　なんでいきなり秘密基地なの？！」

「今から家に帰って掃除道具持ってココに集合な！」

「人の話聞きなさいよ！」

壮太はノリノリだった。にしても、自分勝手な……。

「んじゃ、解散！！」

そう言う壮太はものすごい速さで林を駆けて行った。

「足、はやっ!」

あたしは反論する間もなく走り去られて、ただ立ち尽くすしかなかった。

「……………どうする?」

ヤスが言った。

「どうするたつて…………」

どうすればいいのか分からなくておろおろと戸惑っていた。

「いいよ。やろ、秘密基地。」

旬が言った。

「旬、マジで言つてんの?」

「別に家に居ても暇だし。」

旬にキツパリと言われるとなんか嫌でも納得せざる負えなくなるんだよね…………。

しょうがないのであたしたちは一旦別れて家から掃除道具を持ってきた。

「やつときれいになつたあ…………!!」

みんな疲れきつてだらと汗が流れていく。まるで川にそのまま飛び込んだように髪も、服もびっしょりになっていた。

幸運なことにコンテナの中は案外大した錆もなく、どちらかというときれいだった。

もちろんトラックの運転席も乗れるように砂やゴミを取り除いた。車体に積もっていた枯れ葉は見事に一枚も残らずゴミ袋の中に入れた。

「旬、今何時? あんた懐中時計持つてんでしょ。」

あたしは暑さのあまり手を顔に仰いで言った。

「6時ちよい前。」

「え? うそ…………やばい、あたし帰る!!」

あたしは猛ダッシュでさっさと帰った。

「なんだ・・・あいつ？」

壮太が言った。

「由奈んちのおばさんは恐いから・・・。」

旬が答えた。

「ふん。」

帰りながらも、あたしは明日が楽しみで胸を躍らせていた。魔法とかファンタジーとかそんなものじゃない。けれど、明日はきっと何か起こるようなそんな気がした。

その日見た夕日は、どことなくいつもと違うように見えた。



## 第一話 「秘密基地」 (後書き)

読んでくださりありがとうございます。

なるべく毎日更新しようと思っていますのでよろしくお願いします。

## 第二話 「ビー玉」

「秘密基地完成!!」

壮太が拳を突き上げて言った。

粗大ゴミから拾った綿がはみ出たソファーと学校のいらなくなつた足がガタガタの図工室の椅子。テーブル代わりの段ボール箱。端っこには鉄製の缶が置かれている。たぶんゴミ箱の代わりだろう・・。

「昨日、掃除して、今日、できたばかりなのにもうほこりっぽくいい。」

由奈の言うとおり、コンテナの戸が開きっぱなしだったせいか、砂ぼこりが充満し、あちこちに泥がついていた。

「これぐらい平気だって!」

由奈の事などお構いなしに壮太は基地のソファーに座った。

「そいえばコレ! かあちゃんみんなと一緒に飲めって・・。」

ヤスとせつちゃんが取り出したのはラムネだった。

「ラムネだ! ありがとう。」

せつちゃんが由奈に、ヤスが旬に壮太の分も手渡した。

「由奈! そいえば昨日のデジモン録画した? 見逃しちゃってさ。」

「はあ? もちろんしてあるけど、なんであたしが貸さないといけないのよ?」

旬は壮太に渡そうとしたが、壮太は由奈と話していて気付かないようだ。

「・・・・・。」

シャカシャカ・・・

「ん? ・・・ あ! 旬ありがとな!」

やっと旬に気付き、壮太はラムネを受け取った。

「んじゃ基地完成もかねて乾杯しようぜ!」

壮太がそう言いつつラムネ瓶のビー玉を思いつき押し入れた瞬間・・・

ドバーーーーーー

まるで噴水のようにラムネが飛び出し、壮太の顔面に直撃した。

ポタツ・・・ポタツ・・・ポタツ・・・

「旬、てめえ振っただろ!!」

「・・・くぴ」

旬は斜め下へ目線を逸らし、ラムネを一口飲んだ。

「ねえ？ 結局、乾杯はどうなったの？」

由奈が待ちくたびれて言った。

くぴくぴ・・・

「・・・!!」

カランッ

ぼくらの

ヒミツ基地

ビー玉」

第二話 「

じ~~~~~

ラムネの瓶の中を瓶口から覗いているせつちゃんに由奈は気付いた。

「せつちゃん、どうしたの？」

由奈の声でせつちゃんはふと我に返った。

「ビー玉!! 由奈、ビー玉取れる?!」

飲み干したラムネ瓶を由奈に突き出していった。

「えっ!」

（あたし取り方知らないし・・・てゆかこれって取れるの?・・・ん? 謎かも・・・えっ? ところゆゝときはあゝ・・・）

「せつちゃんのお兄さんはヤスだからヤスに頼みなさい！」

「そっか。あんちゃん力持ちだしね！」

「そうそう。」

（ナイスあたし！！上手くごまかせた！）

「あんちゃん、ビー玉取って〜！」

せつちゃんはヤスにラムネ瓶を突き出した。

「瓶口についてるプラスチックを抜けばいいはず・・・ふんっ！」  
そういうと、ヤスは瓶の底側と瓶口を力いっぱい引っ張った。

（・・・やべえ・・・全然抜けない・・・このままじゃみんなに笑われる！仙人もがっかりするだろうし・・・ここはあいつに任せよう・・・）

「俺がビー玉取り出してもいいんだが、壮太がやりたそうな顔してるからあいつに譲ってやってくれ！」

そう言われてせつちゃんは壮太の方を見た。

「そうかなあ・・・？」

「絶対やりたいはずだ！ほら、行って来い！！！」

無理やり背中を押され、せつちゃんは壮太にラムネ瓶を突き出した。

「壮太、ビー玉取れる？」

「ん？」

（ビー玉かあ・・・！！・・・そうだ！あいつならどんな反応するか見物してやりう！）

「そーゆーのは頭のいい旬先生に頼んでみるといい。」

「旬せんせい？・・・わかった！旬先生にみてもらう！」

せつちゃんは旬にラムネ瓶を突き出した。

「旬先生、ビー玉取ってください！」

「！！・・・！！・・・」

旬は少し立ち尽くすと、何も言わずにトコトコと歩き出した。ゴミ箱代わりの鉄製の缶を持って、基地の外に出た。缶と言っても大人の膝丈ぐらいある大きめの缶である。

ガッシャア・・・ン

!!!!

缶の内側にラムネ瓶を勢い良くぶつけた。

ヒヨイツ

壊れたガラスの破片から旬はビー玉を取り出した。

・・・グッ!!

親指を突き上げ、旬は満足そうだ。

「旬って割と大胆な行動に出るよね・・・。」

「つか割るなら割るって言えよ!!」

由奈と壮太がぶつくさ言っている。

ポトツ・・・コロ・・・

旬の手からせつちゃんの手へ渡された。

「はうあ・・・。」

せつちゃんは目をキラキラと輝かせながら、奇声を発した。よっぽどビー玉が欲しかったのだろう。

「旬、ああがとぉ~~~~!!」

嬉しさのあまり、舌が回ってない。

ガサゴソ・・・ガサゴソ・・・

「何やってんだ?」

基地であるトラックの下に手を突っ込んでいるせつちゃんにヤスは訊いた。

カタンッ

せつちゃんは下からお菓子の缶を取り出した。

ペコンッ

凹む音と共に缶の蓋が浮いた。

ガランッ

「おお~~~~!!」

お菓子の缶の中にはズラリとビー玉が数え切れないほど入っていた。

「これ全部せつちゃんが集めたの?」

「うん！」

「スッゲーー！ー！このビー玉キレイだぜ！」

壮太が手にしたビー玉は黒いのに不思議な輝きを放っていた。まるで映画『Men in Black』に出てくる銀河のようでも美しかった。

### 第三話 「ヒーローごっこ」

「ねえ、次、壮太の番だよ。」

秘密基地の中、トランプでババ抜きをしていたときだった。

「……決めた！」

「なにを……？」

「基地もあるし、丁度五人だし……ヒーローごっこしようぜ！」

ぼくらの

ヒミツ基地

第三話 「

ヒーローごっこ」

「はあ？なんで小学五年生にもなってヒーローごっこなんて……」

「そいえば、よくカクレンジャー見てたな。」

「そうそう。あのオープニング俺まだ歌えるぜ！」

由奈の意見は放っておいてなにやらヤスと壮太はカクレンジャーで盛り上がっている。

「ぼく、やりたーい！」

手を突き上げてせっちゃんと言う。

「仙人がやるなら俺もやる！」

ヤスは弟思いというかなんというか……。

「旬はやらないでしょ？」

由奈は焦ったように言う。

「……暇だし。」

たぶん遠回しに「やる」と言いたいんだろう。

「んじゃ、俺レッド〜！旬がブルーで、仙人がグリーン、ヤスがイエローで、由奈がピンクな！」

「んな勝手に……。」

「待てよ！俺がレッドだろ！」

ヤスが壮太に異議を唱えた。ヤスにもこだわりがあるのだろう……。

「んじゃ、ジャンケンで決めようぜ？」

「ぜってえ負けねえからな！」

そこまで張り切るものでもない気がする。が、二人は真剣だ。指を組んで、手の中を覗くとジャンケンに必ず勝つとか、もしくは手の中に宇宙が見えるとかわけのわからない噂があった。そのせいか、二人とも指を組み、真剣に手の中を覗いている。

「一回勝負だかな。」

「……。」

静かだ……。高がジャンケンなのに緊張感を感じさせる雰囲気。が立ち込めている。

「最初はグー、またまたグー、いかりやチヨースけ、あたまはパー、正義が勝つとは限らない、最初はグー、ジャンケンポイ！！」  
なんとも長い前振りで結局勝ったのは……

「うおっしやー！やつりー！！」

「くそっ！あそこでチヨキだしやあよかった……。」

壮太だった。壮太がパー、ヤスがグーだった。

「へへっ太ってる奴は大抵グーかパーしか出さないんだよ。」

壮太が嫌味ったらしく言う。

「こんのくそやろう……。」

ヤスが怒りをこらえて身体が震えている。

「んじゃ、コレ！！」

壮太は割り箸で作ったゴム鉄砲をみんなに配った。

「こんなもんいつ作っただか……。」



「授業中！案外ばれねえぞ！弾は三発ずつしかないから大事に使えよ。それじゃあ、パトロールにレッツゴー！！」

壮太はそう言って拳を突き上げて基地から出た。

「どろろしてころろろんなにも平和なんだー！ー！ー！！」

そりゃ田舎だもの。というより、通行人さえいない道をパトロールしても意味があるはずない。

「つまんなーい。」

仙人もヒーローごっこに飽きてきたようだ。

「あ、先生だ！」

由奈が指差した先には先生が歩いていてた。たぶん帰る途中なのだろう。

「！」

先生は壮太たちに気付いたのか、こちらにやってくる。

「やべえ！みんな先生を撃て！！」

バシッ

壮太が先生にゴム鉄砲を撃ち始めた。そのせいか、先生が鬼の形相でこちらに猛スピードでやってくる。

「ちよろろ！何してんのよ、あんたは？！」

何故だか分からないが、由奈たちも逃げるはめになってしまった。

「今日、俺、宿題忘れと先生の花瓶割った。」

「そんなので、あたしらまで巻き込まないでよ！！」

バシッ バシッ

逃げながらも壮太はゴム鉄砲を撃っている。

「弾切れた！みんなも撃たないと追いつかれるぞ！」

バシッ バシッ バシッ バシッ

「みんな、撃ってるし！てゆかあたし弾の付け方知らないんだけど！」

「もう！ピンクは使えないやつだな〜。」

こんなことぐらいで使えないやつと言われてもどう反応すべきなのか由奈は困ってしまった。

コケッ

「あ．．．。」

コテンッ

せつちゃんがこけてしまった。

結局、みんなは道の真ん中に正座させられ、先生のくどくどと説教を長ーい間、聞くこととなった。道のアスファルトは塗装が悪く、まるで砂利の上に正座しているように痛かった。

説教が終わる頃には、空が赤く染まっていた。

キキーツ

人も車も通らなかったこの道に、一台の車が停まった。

「旬、今日は外で食事にするから乗りなさい。」

旬のお母さんとお父さんだ。

パタンッ

旬は車に乗り、ドアを閉めた。

「また明日にでも、旬と遊んでくださいね。それじゃあ．．．。」

「またな〜。」

「またね。」

みんなは挨拶したが、旬は軽く手を振るだけだった。それから車は走り出し、行ってしまった．．．。

「んじゃ、俺らも帰る。またな〜。」

「バイバイ！」

「うん、またね。」

ヤスとせつちゃんも帰って行った。

ゴオオオン

あたりには鐘の音が響いている。六時になったことを知らせているのだ。

「やばっ！早く帰らないとー!!」

由奈が慌てている。

「由奈・・・」

走って帰ろうとする由奈を壮太は止めた。

「いつしよに帰ろう・・・。」

「・・・いいよ。いつしよに帰ろう。」

由奈はニコツと笑い、言った。由奈は急いでいたが、いつもと雰囲気が違う壮太を放っておけなかったのだろう。壮太の顔には、不安や悲しみが見えた。

「・・・。。。」

二人並んで歩いているが、沈黙が続いていた。

「・・・ねえ？そいえば聞いてなかったけど・・・なんで越してきたの？」

話を振ってきたのは由奈だった。

「・・・ばあちゃんちに住んでんだ。」

「お父さんとお母さんは？」

「天国。たぶん地獄には言っていないと思う。」

「ごめん・・・。」

「謝んなくてもいいよ。寂しくないし。でも匂がちよっと羨ましかった。」

「匂の家族は仲良いしね・・・。」

何故だか由奈の表情も暗くなってきた。

「由奈んちは？」

「・・・あたしの家は・・・。」

「あ！あれ、由奈の母ちゃんじゃね？」

由奈の家の前で女の人が立っていた。壮太の言つとおり、お母さんらしい。

「由奈、おかえり。あら、お友達と一緒になのね。」

「え・・ええ。」

につこり笑っているお母さんとは裏腹に由奈は苦笑いをしている。

「じゃあ、またな！由奈！」

「うん、また。」

由奈と話して気が楽になったのか、壮太は元気に賭けていった。

逆に、由奈には元気がなく、手を振り終わった後の下に下ろした手が震えていた。拳を握っても震えが止むことはなかった。

#### 第四話 「野球帽」

「うーっん．．．なんかいつもと違う．．．。」

由奈がせつちゃんを見て何か悩んでいる。

「ん？．．．どうした？？」

そこへ壮太がやってきた。

「ああ、壮太。いや、ちょっとせつちゃんがいつもとどこかが違  
ってるように見えるんだけど、そのどこかが分らないのよ．．．。」

「

「はあ？」

壮太がじろじろとせつちゃんを見渡した。

「．．．．．気のせいだろ。」

「そんなことないわよ。どっかが．．．どっかが違うのよ。」

二人はせつちゃんの服、顔、靴までじろじろと見るが悩んではか  
りだ。

トコトコトコ．．．

そこへ今度は匂がやってきた。そして、せつちゃんの目の前まで  
来た。

「．．．．．キャップ。」

ぼくらの

ヒミツ基地

第四話 「

野球帽」

「ああ！．．．ホントだ！いつもならヘルメットなのに、今日は野  
球帽になってる！．．．」

「しかも逆に被ってる！！なんで？！！」

壮太も由奈も驚きが隠せないらしい。

チヨイ チヨイ

ヤスの手が基地の外から手招きをしている。壮太たちは、せつちやん一人だけを残し、ヤスの方へ集まった。

「なんで、野球帽になつてんだ？・・・ボソッ」

「それがさ・・・かくくしかじか・・・ボソッ」

ひそひそ話でせつちゃんには聞こえないようにしている。

「はあ？」

野球帽になつた理由をヤスから聞いたがいまいち分からないようだ。

「だから、サトシがモンスターボール使うときに逆に被るじゃん。それにポケモンの新しい金と銀だっけ？あの主人公もだし、コナンもやってたとか言つて昨日いきなり帽子買いに行かされて・・・ボソッ」

「つまり、キャラクターの影響つてことね・・・ボソッ」

由奈が呆れている。

「でもな、野球帽に気付くとスツゲエ違和感あるよな・・・

ボソッ」

壮太がチラッとせつちゃんを見る。

「だろ。それに俺的にはヘルメットの方がかわいいと思うんだよ！」

「・・・。。。」

みんなちよつと引いている。

「ブラコ・・・」

バツ

「つ、つまりはヘルメットをまた被ってもらえるようにすればいいのよね！」

旬が何か言おうとしたが、由奈が手で口を慌てて塞いだ。

「キャラクターで野球帽を被るようになったんだから、ヘルメットを被ったキャラクターを見せればいいはず!!」

由奈は意外とノリノリだ。

「ってことで！ヘルメットと言えばロックマンのメットールでしょう!!」

イラストをせっちゃんに見せながら言った。

「ザコキャラじゃん。」

ガビーン

せっちゃんの発言に由奈に衝撃が走り、落ち込んでしまった。せっちゃんには悪気はないのだろうが、由奈は相当ショックを受けてしまったらしい。

「イラスト自作までしてがんばったのに・・・」

「自作だったんだ。」

「メットールこんなにかわいいのに・・・うう・・・」

「メットール好きだったんだ。」

「ええい！それならデジモンのソラで・・・!!!!」

いきなり由奈は立ち直り、叫んだ。

「ソラ、女じゃん。」

ガガガーーーーー

今度は由奈の頭に大岩が落ちてきたような衝撃が走った。

「た、たしかにさあ・・・ソラはおんなのこだけどさあ・・・こ  
うさあ・・・なんかさあ・・・」

崩れるように倒れながら、由奈はぶつくさとかげている。

「そうだ！野球帽よりヘルメットの方が頑丈で安全性の高いところを見せれば!!」

壮太が提案した。

「……………」

「いいか、仙人？もしもだ！もしも金属バットが空から降ってきたとしたら……」

絶対にはないと思う。とみんな思いながらも壮太の話を聞いている。

「ヘルメットだと……」

ガンッ

そう言うのと、壮太は地べたに置いたヘルメットに金属バットを自分の肩の位置から落とした。

「ほら、このとおり！傷一つないし、凹んでもいない。野球帽だとうなると思う？」

ビシッ

壮太はせつちゃんに向かって指差した。

「さあ？」

せつちゃんは首をかしげている。

「では、実験してみよう！」

壮太はせつちゃんの帽子を取り上げ、地べたに置いた。

ベシヤッ

丸みを帯びていた野球帽は、見事にも凹み、ある意味悲惨にも見えた。

「……………う・うう……うわああああん！！壮太が壊したあああああ！！！！」

せつちゃんが泣き始めてしまった。

「え、いや、ちょっと待って！凹んだだけで元に戻せるから！！いきなりのせつちゃんの号泣に壮太はあたふたしながら帽子を拾い、凹みを直した。

「結局、まだ野球帽のままだね……せつちゃん。」



せつちゃんは野球帽が気に入ったみたいだ。

「……………」

トコトコトコ……

せつちゃんの方へ匂が歩いていった。

「……………ボソッ」

何かをせつちゃんに話しているようだが、壮太たちのところまでは聞こえなかった。

フルフルフル

なんだか涙が零れそうな顔をしてせつちゃんは首を横に振っている。

カポッ

「……！」

せつちゃんが野球帽ではなく、ヘルメットを被った。

「匂、一体どんなマジック使ったんだよ！」

せつちゃんと匂のところへ、壮太たちは駆け寄ってきた。

「…………マッキー。」

「そっちのマジックじゃなくて魔法の方だと思うよ。」

由奈が助言した。

「…………ヘルメットの安全性。」

「それなら壮太もしたじゃない。」

「あと……………」

「あと？」

「今年の夏に起こること。」

匂とせつちゃん以外みんな頭がちんぷんかんぷんだ。

でも、せつちゃんがヘルメットを被ってくれるようになったのでみんな一安心した。

そして、今年が一九九九年で『恐怖の大王』が来ることをみんな思い出したのは、もっと後のことだった。

## 第五話 「雨」

ザーーーーーー

大粒の雨が地面に叩きつけるように降り、ものすごい大きな音を奏でている。

「あゝあ、図書の本、整理してたらこんなに降るなんて・・・ついてかも。」

学校の玄関で生徒、先生が誰一人いない中、由奈だけが立ったまま空を見上げていた。

ぼくらの

ヒミツ基地

第五話 「

雨」

「雨、すごい土砂降り・・・もうそろそろ梅雨だもんねえ。こんなことなら、旬に本の整理手伝ってもらえばよかった。旬も同じ図書委員だし、傘持ってたし・・・。」

今更悔いても仕方ないと分かっている、つい口に出てしまうものである。

チラッ

後ろを振り向くと靴箱の隣には、傘立てとバケツが置いてあった。

「ハア・・・さすがにバケツ被って帰るのも恥ずかしいしな・・・。」

ガサガサ・・・

何か物音がする。玄関の端に設置してある倉庫からだ。

（この時間、生徒は残っていないはず。先生も職員会議で全員職員室に集まっているはずなのに。）

ガラッ

不審人物かもしれないと思った由奈は、倉庫の扉が開く音と同時に靴箱の陰に隠れた。

「ゲホッゴホッ！埃っぽいし、臭いし、最悪だなこの倉庫。」

倉庫の中から出てきたのは壮太だった。  
「壮太！あんたこんな場所で何してたの？！」

壮太と気付くと由奈は靴箱の陰から出てきた。  
「由奈こそなにしてたんだよ？そいえば、先生は？」

「先生？担任の先生ならもうとくに帰ったけど？」

「うしっ！居残り勉強しなくて済んだぜ！」

壮太はガッツポーズを取っている。

「あんた、まさかまた宿題忘れたの？」

「男には宿題よりやらなければいけないことがあるんだ。」

「なにかっこつけてんだか・・・。」

由奈が呆れている。

「あ、そうだ！壮太、傘持ってる？」

「男はそんなもん持たない！」

「じゃあ、男は濡れて帰るわけ？」

「うう・・・。」

由奈に言われて、壮太は即答できなかった。

「あ！」

何か閃いたのか、壮太はまた倉庫に入ってしまった。

「あつた、あつた！」

数分して壮太が倉庫から出てきた。何か持っている。

「ジャジャーーン！！」

そう言っただけで壮太が由奈の前で広げたのはビニールシートだった。  
「・・・まさか、それで帰ろうと・・・。」

由奈の額から変な汗が流れている。

「それがどうかしたか？」

「だって、それ・・・砂だらけだし、汚いし・・・。」

「雨で汚れも流れるって！そーゆーおまえはどうやって帰るんだよ。」

「うつ。」

由奈は痛いところを疲れて返す言葉がなかった。

「いつしょに入るか？」

壮太は由奈にビニールシートを差し出した。

「・・・・・・しょうがないから入ってやるわよ！」

由奈は、ビニールシートを壮太の手から鷲& amp; #2568

1；んで取ると、後ろを向いて照れ隠しした。

「もうちょっと寄ってくれないと濡れちゃうじゃない！」

「んなこと言ってたって、これ以上寄ったら、俺が濡れるんだよ！」

結局ビニールシートの取り合いで喧嘩になってしまった。

「大体このアイデアは俺が考えたんだぞ！」

「あたしは濡れたらいけないの！！」

「なんで濡れちゃだめか理由言ってみろよ！」

「！・・・・・・」

壮太の言葉が何か引つかかったのか、由奈はひどく動揺している。

「・・・・・・ママに・・・・ママに怒られるの・・・・。」

壮太の耳には、微かにそう聞こえた。  
バサッ

「それやる。俺、濡れるの好きだし。」

壮太は、ビニールシートを、ロープのように由奈に被せてあげた。  
「でも・・・・・・ありがとう。」

由奈は何か言いかけたが、笑って御礼を言った。

ポツッ ポツポツ・・・

由奈の家に着くころには、雨は止みかけていた。

「今日はホントにありがと！おかげで濡れずに済んだわ。」

「明日、そのシート返すの忘れんなよ。」

「分かってるって。それじゃ、またあした。」

「おうっ。またな。」

由奈と壮太は手を振って別れた。

キィ・・・

由奈が玄関のドアを開けようとした時だった。

「由奈                    ！！」

壮太の叫び声が聞こえた。振り返ってみると、小さく映る壮太の影が、空を差していた。

「レインボー……！！」

空には小さいけれど、とてもきれいな虹が架かっていた。

## 第六話 「水泳教室」

「あ！そろそろ行こう。」

壮太はそう言つと、立ち上がつて袋を背負つた。

「どこいくの？」

由奈が訊いた。

「今日、休日だけど学校のプール開いてるって先生言つてたじゃん。それにほら、俺もみんなもプールセット持つて来てるぞ。」

壮太の言つとおり、みんな秘密基地に来る前に用意しておいたよ  
うだ。

「由奈は行かないのか？」

ぼくらの

ヒミツ基地

第六話 「

水泳教室」

「え・・・あたし、いいよ。行かなくて・・・。」

由奈は手を横に振りながら言つた。

「ん？・・・まさかおまえ泳げないんだろ？！俺が教えてやるから来いって・・・。」

壮太は、由奈の手を握り、強引にプールに連れて行こうとしてい  
る。

「あれ？・・・でも由奈たしかおよげ・・・。」

何か言おうとしたせつちゃんに匂がそつと口を塞いだ。

「何も言つな。」

「にやんどえ？」

口が塞がっているせいで、せつちゃんの滑舌が悪くなった。どうやら「なんで？」と聞きたかったらしい。

「…………このほうがおもしろい。」

旬はいつもの無表情ボーカーフェイスでそう言った。

「んじゃ、今から由奈のために水泳教室を開くぞ。もちろん、コイチは俺だ。」

ピコーン

壮太の言っていることもおかまいなしに、由奈はゲームボーイをやり始めた。

「まずは、水に慣れることが基本だよな。……つか、聞けよ！！」

やっと壮太がツツコミを入れた。

「あ、コンパンが進化しちゃう。BBBBbb……。」

「マジで聞けよ！！」

ボタンを連打する由奈に対し、だんだん壮太に苛立ちが見え始めた。

「大体、何でおまえ水着じゃねえんだよ！」

「壮太が家にも寄らせてくれないで、ここに来たから水着持って来れなかったんじゃない。」

「うつ……。そ、そういえば、もう夏なのになんでおまえ長袖、長ズボンなんだよ?! 暑苦しいぞ！」

壮太は言い返せないのて話を切り替えることにした。

「そいえば、由奈、最近ミニス力履かないな。去年は季節関係なく冬でも履いてたのに。」

ヤスも指摘した。

「ねえ、なんで？」

せつちゃんも理由を知りたいようだ。

「……………そんなの決まってるじゃない。日焼けしないようによ！」

由奈の発言の仕方は、苛立って叫んだようにも見えるが、強がっているようにも見えた。

「日焼けしたくなかったらこんなとこに来なきゃいいじゃん……」

「だから、あんたがここに連れてきたんでしょ！」

壮太は天然なのかわざとなのか、由奈を怒らせるような発言ばかりをしてくる。

「てゆか、あたし泳げるし！！」

「へ？」

「そうだよ。由奈去年の水泳大会1位だったもん。」

由奈の発言にせっちゃんがフオローを加えた。

「マジ？」

コクッ

壮太は旬とヤスの方を振り返ると、二人ともうなずいた。

「……………」

プールには他の生徒たちの楽しそうな声が響いているのに、壮太たちのところには、異様な静寂が漂っていた。



## 第七話 「蜚」

「ねえ、今日行こうよ。」

せつちゃんがヤスになにやら駄々をこねているようだ。

「何の話し？」

由奈が二人に聞いた。

「今日の夜、ホテル見に行きたいの！」

ぼくらの

ヒミツ基地

蜚」

第七話 「

「ホテル？」

由奈が首をかしげている。

「違う違う、ホテル！」

ヤスが手を横に振って答えた。

「ああ！もうたくさん飛んでるらしいね！」

「んじゃ、今日みんなで行こうぜ！」

三人の話に入ってきたのは壮太だった。

「えっ！」

「由奈、何か都合悪いのか？」

「そーゆーわけじゃないけど・・・明日も学校だよ？」

「大丈夫だって！旬も来るんだぞ！」

遠くから話を聞いている旬に壮太は言った。

午後八時、あたりはすっかり黒一色だ。  
秘密基地の前に、旬、ヤスとせつちゃん、壮太の順に集まってきた。

「ごめん、おまたせ〜！・・・はあっはあ・・・。」

最後に息を切らせながら、由奈がやってきた。

「遅いぞ！」

「いつも遅刻してるあんたに言われたくないわ。」

由奈は壮太に言い返した。

「そんなことより早く行くぞ！」

ヤスが言い、みんな歩き出した。

「・・・大丈夫か？」

歩き出し始めた由奈に対し、旬が言った。

「大丈夫よ。急いで来たから疲れただけ。」

「・・・家のことだよ。」

「！」

旬は眉間にしわを寄せ、由奈を通り越して言った。旬に言われ、

由奈は一瞬足が止まってしまった。

「わあっ！すげえ！！」

川原に着くと無数のホタルが飛び交っていた。

「間近に見れたらいいけど、籠持ってきてないからすぐ逃げちゃうだろうなあ。」

由奈がそんなことを言っていると旬がすぐそばの畑に入っていた。

「旬、何してんだ？」

壮太が訊いた。

「あ、旬、今年もやるんだあ！」

「毎年恒例みたいなもんだよな。」

せつちゃんとヤスがわくわくしながら言っている。

パキッ

太い玉ねぎの葉を折り、匂が畑から帰ってきた。玉ねぎの葉は、ねぎっぱいが食べてもおいしくなく、処分されるので、折ってもなら被害はない。毎年、後でちゃんと由奈たちは畑の持ち主に謝りに行くが、叱られることはなかった。

パシッ

スポッ

匂は両手でホタルを捕まえると、中空のねぎの中に蛍を入れた。

「なんで、ねぎに蛍入れてんの?!」

壮太が驚きながら言った。

「ねぎ、粘着性強いから逃げねえんだよ。まあ、長く入れてると弱るからすぐ逃がすけど。」

ヤスが偉そうに壮太に説明している。

ねぎがまるでライトサーバーのように光っている。とてもきれいだ。

「蛍つて、案外かわいい目してるわよね……。」

「つか、どれが目？」

「ここにあるじゃん!」

そんな話をしている間にも、あたりはどんどんと暗闇を帯びていく。

「そろそろ、逃がして帰りましょう。」

「なら、俺、逃がしたい!」

壮太はねぎから蛍を手に取り、手をゆっくり開けた。

ふわわぁ……

蛍は、ゆっくりと飛び上がり、近くに生えている木に留まった。

それがイルミネーションのようで、ずっと見ていたかったが、みんなは、振り返りながらも、家へ帰っていった。

## 第八話 「壊」

「ホテルを見て帰った翌朝」

「ママ、おはよう。」

ネグリジエ姿で、目を擦りながら、階段から由奈が降りてきた。

「あなた昨日の夜、家から抜け出したわね……。」

テーブルに向かって座っているママは、由奈が来るなりそう言った。後姿の背中が何かを物語っているかのように、異様で、暗くて、とても嫌な雰囲気だった。

ぼくらの

ヒミツ基地

第八話 「

壊」

ザーーーーーー

「今日、スツゲエ雨だな……。」

学校の教室の窓からグラウンドを見ながら壮太が言った。

キンコンカーンコン

ガラガラ……

チャイムと同時に先生が教室に入ってきた。

「それじゃあ、朝のホームルーム始めるぞお。」

先生の声でみんなは一斉に席に着いた。

「あれ？……由奈、今日来てないな。風邪か？昨日、あんなに元気だったのに……。」

壮太の言ったとおり、一つ席がぽっかりと空いていた。  
「……………」

旬は何かに気付いたのか、由奈の席をじっと見つめた。

「大雨警報が出ているので、今日は午後はない。みんなは、帰る支度が出来次第、直ちに帰るように。」

「先生、さようなら。」

「先帰る。」

生徒全員で先生に挨拶を済ますと旬は急ぎ足で教室を後にした。

「俺と仙人も今日は早く走って帰るから、一緒に帰れねえ。畑の手伝いしなきゃいけないんだ。」

「雨なのにか？」

「雨だからやることがいっぱいあるんだよ。じゃあな！」

ヤスも行ってしまった。

「・・・俺も警報出てるし、さっさと支度して帰ろう。」

ランドセルを背負い、一人のんびりと教室を出た。

（あ！そいえば、来週の月曜、リコーダーのテストだっけ？・・・たしかリコーダーの間、秘密基地に持ってってそのまんまだ。土日はあちゃんが畑仕事手伝ってくれて言ってたから取りに行く暇ないだろうなあ・・・。しょうがない、秘密基地に寄って帰るしかないかあ。でも、警報出てるから、真っ先に帰ったほうがいいかな・・・。）

玄関で靴を履き替えながら、ふとそんなことを思っていた。

ボツツ　ボツツ　ボツボツツ

大粒の雨で傘にも大きな音が鳴り響いている。

バシヤバシヤバシヤバシヤ

誰かが走ってくる。

「ああ、やっぱり高山さんとこの旬君だった。こんにちわ。」

走ってきたのは由奈のお父さんだった。

「・・・・・・こんにちわ。」

「それにしてもすごい雨だねえ。」

「・・・・・・。」

由奈のお父さんはセカンドバッグを傘代わりにし、雨を凌いでいた。

「・・・・・・入りますか？」

旬は由奈のお父さんの方へ傘の柄を掲げた。

「いいのかい？」

「丁度由奈の家にお見舞いに行くところですから。」

「えっ？由奈、今日学校休んだの？残業で結局昨日帰れなかったから、おじさん知らなかったよ。」

「・・・・・・。」

それを聞いたせいか、旬の顔つきがますます険しくなった。

ザーーーーーー

「早くリコーダー取って帰ろう。」

どんどんと激しさが増す雨の中で、壮太は秘密基地のある林の中に入っていく。

ガチャッ

由奈のお父さんは、家の玄関のドアを開け、旬を家の中に入れてあげた。

「ただいまー。」

「・・・・・・。」

返事がない。

「まあ、とりあえず上がってくれ。由奈は風邪かなんかで寝込んで自分の部屋にいるだろうから。」

「お邪魔します。」

そう言つと、旬は階段を上つて二階に行き、由奈の部屋のドアの前に立った。

コンッ コンッ

「由奈・・・いるか・・・？」

「・・・・・・・・。」

二回ノックをし、声を掛けたが返事どころか物音一つない。カチャッ

旬は返事が返つてこないまま、ドアを開けた。すると、部屋の中には由奈の姿がなかった。

ガシャーーン

そのとき、一階で何かが割れるような音がした。

旬は慌てて階段を降り、音がした方へ行つた。

「どうせ、またあの女と浮気でもしてたんでしょ!!」

「そんなこと、今はどうでもいいだろ!それよりこの床に散らばつてる血はなんだよ?!由奈に何かしたのか?!」

さっきの音をたてて割れたのはスタンドランプだった。割れた破片が飛び散る中、由奈の両親は夫婦喧嘩をしている。あたりには、乾いた血の跡が、数滴ではなく、水溜りのようにあった。

「・・・・・・・・。」

旬は何も言わずに、は飛び散つた破片を拾い上げて、夫婦喧嘩している二人に割つて入った。

「そんなことしてる場合じゃないよ。」

その言葉で我に返つたのか、由奈のお父さんは玄関へ走つていった。

ガチャン

ドアが壊れるくらいの勢いで開け、雨の中、外へ走つていった。そして、それを追いかけるように旬も由奈の家から出ていった。

「……………うう……………ういっく……………ひっく……………えっぐ……………  
ううう……………」

「あ……………」

壮太が秘密基地に入ると由奈がいた。基地の隅っこの方に座って泣いていた。それもネグリジエの姿で。

「どうしたんだよ？」

「……………うう……………」

壮太が声を掛けてもうつむいたまま泣いているだけだった。

由奈の様子を見ると、裸足であることに気付いた。しかも、傘を差さずに来たらしく、髪がまだ湿っていた。

そして、ネグリジエからでている脚にはたくさんのあざと傷口があった。

ネグリジエの模様のせいで、気付かなかったが、よくよく見ると、袖には血が布に広く染込んでいた。



## 第九話 「手のあたたかさ」

「・・・うつ・・・うえ・・・ぐ・・・」  
泣いている由奈。脚にはあざと傷。壮太はどうしたらいいのかわからなくなった。

ぼくらの

ヒミツ基地

第九話 「

手のあたたかさ」

「ひつく・・・!!」

じーーーーー

ササッ

壮太が由奈の顔をじつと見ている。泣き顔を見られたくない由奈は、手で必死に顔を隠した。

じーーーーー

それでも、下から覗くように、壮太が見てくる。

「・・・ひっ・・・な・・・なひよ?」

由奈は途切れながら裏声で言った。

「ばあちゃんがかさ、言ってたんだ。瞳めを見れば、その人の気持ち  
が分かるって。だから、アメリカ人は瞳を見ながら話すんだって。」

壮太は微笑んで由奈の瞳を見た。

「・・・」

その壮太の言葉と笑みで気が楽になったのか、由奈の呼吸が落ちて  
着いてきた。

「腕、大丈夫か?袖に血、付いてるけど。」

壮太が心配そうに腕を見た。

「うん・・・もう血、止まったから。」

素っ気無い態度で返した。

「・・・あゝあ・・・見られちゃった・・・体育の時だって長袖とハイソックスで必死に隠してきたのに・・・もう意味なくなっちゃった・・・。」

由奈が吹っ切れたように、喋り始めた。

「傷跡、残らなければいいけど・・・いつそのこと、整形して、こんな汚い身体捨てるかな・・・。」

「汚くなんかないよ。」

その言葉が由奈の心に響き渡った。

「だって、こんな大きな傷口にも耐えて、治そうとしてる。偉いよ、由奈の身体は。」

壮太のひとつひとつの言葉が由奈の心を癒し、涙が溢れ出しそうになった。

「ありがとう。」

今日、初めて由奈は優しく笑った。

「・・・・・・寒い。」

由奈の身体は、雨に濡れたせいで、冷え切っていた。

「俺の服、着るか？」

壮太がTシャツを脱ごうとした。

「いいよ。壮太、それしか着てないんでしょ？壮太が今度は冷えちゃうよ。」

「いいから、着ろつて。ズボンも貸してやる。俺はばあちゃんが雨だから持ってきて言ったタオルあるから。」

壮太から服を突き出され、由奈は渋々隅のほうで着替えた。壮太は、後ろを向き、フェイスタオルをズボンの代わりに巻いた。

「くしょんっ！」

壮太がくしゃみをした。

「壮太、大丈夫？ やっぱり、身体冷えたんじゃ……。」

「大丈夫だって。誰かが噂してっからくしゃみしたただけだって……くしょんっ……くしょんっ……！」

壮太の胸に、由奈が寄りかかってきた。

「こうすればあたたかいよ。」

由奈は、壮太の身体に手を添えて言った。

「壮太の鼓動……速くなってる……。」

そう言われ、壮太の顔が赤くなった。

「……ママは……ママは男の子が欲しかったの。でも、産まれたのはあたしで……難産で子宮を摘出しちゃって……ママはもう赤ちゃんが産めなくて……。」

去年のクリスマスにサンタは来なかった……パパも帰ってこなくて……その日から、ママが泣いて、壊れて……。

あたしはどうすればいいかわからなかった……けど、今日わかった。」

「どうしたいんだ？」

途切れ途切れに話す由奈に、壮太が問いかけた。

「ママから逃げたい。」

壮太の胸に、涙の雫が零れ落ちた。

「由奈、帰ろう。」

壮太が立ち上がった。

「でも、帰ったらママが……。」

「ママなら追い出せばいい。」

壮太は由奈に手を差し伸べた。

「ごめん。」

壮太におんぶされて、由奈が言った。

「いいよ。由奈、裸足だし。それより、ちゃんと傘持っとけよ。」

壮太は、前にランドセル、後ろに由奈を背負い、とても辛そうだ。

由奈は、ネグリジエに着替えていた。だいぶ乾いていたのだろう。

壮太もＴシャツと短パンを履いていた。

「壮太、無理しないで。」

壮太の呼吸が荒くなってきた。

「あたし、降りるから。」

そう言つと、由奈は、壮太の背中から降りた。

「さつきより雨、ひどくなってるし・・・ちよつと休まなきゃ。」

壮太と由奈は、バス停ので雨宿りすることにした。トタン屋根は激しく唸るような音が出ている。

「・・・由奈？」

由奈が壮太の肩に寄りかかってきた。由奈は瞳を瞑って寝ていた。きつとずっと泣いていたから疲れたのだろう。

「俺だつて・・・眠いのにな・・・。」

ザーーーーーー

バシャバシャバシャッ

「・・・あー！」

大雨のせいで視野が狭い中、バス停が見えてきた。しかも、誰かベンチに座っているらしい。

「おじさん、こつちー！」

旬は大声で叫び、手を振った。旬も由奈のお父さんも傘を持たずに探し回っていたので、頭も服もびつしより濡れていた。というより、現在進行形で濡れている。

「・・・！！！」

バス停に駆けつけると、壮太と由奈は、互いに寄り添って寝ていた。

「ふああ・・・。」

大きな口であくびをし、壮太が起きた。

「由奈！！よかったあ！！！」

そこへ由奈のお父さんが駆けつけた。大きな声だったのにも関わらず、由奈はすやすやと寝ている。

「え・・・つと君は？」

「水谷 壮太って言います。」

「・・・由奈が世話になったようだね。ありがとう。」

そう言つと、由奈のお父さんは由奈を抱きかかえた。

「あ・・・傘どうぞ。俺は濡れても構いませんから。」

壮太は由奈のお父さんに傘を差し出した。

「ありがとう。それじゃ。」

壮太から傘を受け取ると、由奈のお父さんは雨の中へと消えていった。

「・・・・・・・・。」

二人は、由奈たちが見えなくなるまで何も言わなかった。

「旬、いつしよに帰ろうぜ。」

「断る。」

「んなこと言わずに帰ろうぜ？」

「やだ。」

即答されても、壮太も粘ったが、旬は足早に歩き出した。

（月曜になると、由奈は何もなかったかのように登校してきた。あの日、由奈のお父さんとお母さんは離婚したらしい。でも、由奈は清々しい顔をしていた。それはとてもきれいな顔で見惚れるくらいだった。）

「壮太、そろそろあんたの番でしょ・・・ボソッ」

由奈が小言で話しかけてきた。今は、リコーダーのテスト中だ。由奈はもうテストを済ませたようだ。

「それが・・・リコーダー忘れちまって・・・ボソッ」

壮太はあえて秘密基地に置き忘れたことを言わなかった。

「・・・。。。」

「それじゃあ、次は水谷君。」

音楽の女の先生が壮太の名前を呼ぶ。順番が回ってきてしまった。「ハイッ！」

壮太は大きな返事をして立ち上がった。が、リコーダーがないのがばれるのは時間の問題だ。

クイツ

壮太の袖を由奈が引つ張った。

「あたしの貸してあげる。」

リコーダーを突き出して由奈はそっぽを向いていった。

「でも・・・」

「早く行かないと失格になって居残りになるわよ。」

由奈が急かし、壮太は先生の元へ向かった。

このあと、壮太は緊張したのか、それとも全く練習してなかったかは分からないが、音程が多いにずれてしまった。そして、クラスの全員にそのひどい音を聞かれてしまった。

「壮太、結局失格で明日居残りじゃない。ちゃんと練習してた？」

「練習したよ！完璧に！！」

「なら、なんで居残りになってんのよ?!」

由奈が壮太に問いたです。

「そ、それは・・・リコーダーがあれで・・・か・・・」

「か？」

「だから・・・か・・・かんせ・・・」

「間接キス。」

「！」

旬に言われてしまった。

「なっ！！そんなこと思って吹いてたの？！もう最低！！！！」

「ち、ちげえって！！」

「どこが違う？」

顔が赤くなる壮太に対し旬が突っ込んだ。

## 第十話 「カゲフミ」

「ねえ・・・壮太、さつきから後付いてきて何してんの？」  
教室から図書室へ行くまでの廊下で由奈が振り返って聞いた。  
「ばかつ！急に動くな！影が・・・」

ぼくらの

ヒミツ基地

第十話 「

カゲフミ」

「かげ・・・？」

「影以外のところ足付いたら底なし沼なんだよ！」

「はあ？・・・わけ分かんない。」

由奈は壮太の行動に呆れ果てている。

「つか、おまえ、なんで図書室行つてんの？」

「今日は新しい本届いたから、旬と本の整理よ。だから、帰宅するのは当分後よ。」

「ええ〜！俺、せっかく終業式終わって、今から夏休みなんだから、早く帰りたいんだけど。」

壮太は、由奈の影からはみ出さないように、一定の距離で由奈の後を付いてきている。

「勝手にあたしの影に付いてきて、文句言わないの！」

「んじゃ、他の影に移ってやる！」

とは言ったものの、廊下には余分な家具や機材がなく、図書室へ続く廊下は由奈以外、誰も通っていないかった。

「・・・・・・・・。」

「あら、他の影に移るんじゃないの？」



由奈がからかう。

「俺も、丁度図書室に用事があるんだよ！」

「あら、そう。」

壮太の嘘はバレバレだ。

ガラガラッ

「ごめん、匂、遅れちゃって……。」

図書室に入ると、もう匂が本の入ったダンボールを担いでいた。

「いい……よ……。」

匂は、由奈の後ろにいる壮太に気付いた。

「……二人羽織でもするの？」

「しねえよ！影踏みだっつーの！！」

匂の天然な発言に壮太が突っ込んだ。

「ねえ、まだー？」

由奈と匂が本の整理をしている中、壮太はただ一人、本棚の影でじつと帰るのを待っていた。

「なんか本でも読みなさいよ？」

「んなこと言われたって……ゾロリも乱太郎も読んだし……。」

「

「あんた、そーゆーのばっか読んでんの？もっと漢字の多いものでも読んだら？シャーロックとか、アンネの日記とか……誰かの伝記とか……。」

「絵がないと読む気失くす。漫画とかあればいいのに……。」  
「あるよ。」

そう言つと、匂は漫画とは思えないサイズの大きな本を持ってき

た。

「ひのとり？」

「あ、鉄腕アトムとかの人だ。」

由奈は手塚治をかるうじて知っているらしい。

「それ、おもしろいよ。」

旬が言うのだから、相当おもしろいのだ。

『火の鳥』は手塚治が手掛けた未完の作品である。第一巻は黎明編から始まる。3世紀の日本のヤマタイ国とクマソ国の争いが舞台である。他にも、ギリシャ編、宇宙編などとたくさんあり、未来と過去が交互に描かれている。

手塚治ならではのコマの使い方と物語がとても印象に残る作品で、唯一、学校に置かれる漫画だった。

「んーじゃあ、帰るまでこれ読んどくか・・・。」

壮太は胡坐をかきながら本のページを捲った。

「壮太、整理終わったから帰るよ！」

由奈が壮太の元へ寄ってきた。

「・・・・・・。」

「壮太？・・・おうい、壮太あ？」

「・・・・・・。」

由奈が壮太の目の前で手を振っても返事がない。『火の鳥』に目が釘付けた。

「もう・・・あたしがいなくちゃ、影無くて帰れないわよ。」

「それはやだー！」

どうやらまだ影踏みは続いていたらしい。

結局、壮太は『火の鳥』を借りずに、二学期の楽しみとしてとっておくことにした。

「ねえ・・・そんなにくっついて歩かないでよ。あたしが歩きにくいでしょ。」

「だってさつきより、影が小さくなってるだもん。しゃあねえじやん！」

「だったら、あたしじゃなくて、旬に付いてよ。」

「うるさいなあ。わかったよ！」

由奈に言われ、壮太は旬の影に飛び移った。

「・・・影料100円。」

旬が壮太に言った。

「金持ってねえよ！」

「旬は昔っからそーやってからかうの好きだから。」

由奈が苦笑いしながら言った。

「そーいえば・・・由奈と旬って結構仲いいな。ヤスたちより。」

「小学校入る前からの幼馴染だからね。」

由奈は旬に向かって微笑んだ。

「旬は前からこんな性格でばーっとしてたかな。」

「・・・由奈は昔は臆病だった。」

「ええ！あたし、そんな臆病だった？全然そんな意識なかったんだけど・・・。」

「だから、こうして・・・。」

壮太は由奈の手を取り、ギュッと手を結んだ。

「ずっと手・・・結んでたじゃん。」

旬は顔を下に向き、隠しながら言った。

「そうだったね。」

由奈には、旬の手の暖かさが懐かしく感じられた。

「じゃあね、またあした！」

「またあしたな。」

旬は由奈の手を放し、手を振って別れた。

「・・・またこつから先、壮太の影係かあ。」

由奈がめんどくさそうに言った。

「あ、そうだ！・・・この前、壮太が貸してくれた傘、持ってきたんだった。」

由奈は、ランドセルに掛けていた壮太の傘を手を取った。

「ごめんね、返すの遅れて。」

由奈は両手を合わせて言った。

「丁度いい！それ、日傘にすれば、日陰ばっちりじゃん！」

壮太は、由奈に返してもらったばかりの傘を差した。

「由奈も入るか？日差しきついし。」

「あたし入ったら、壮太はみ出て底なし沼にはまっちゃうかもよ？」

「いいよ。影貸してくれた借りもあるし。」

壮太に傘に無理やり入れられ、結局由奈は入って帰ることにした。雨も、雪も降ってないのに傘を差している。とても変で、不思議な感じがした帰り道だった。

## 第十一話 「三時間内にクリアしろ！」

「やったー！勝った！」

スーパーファミコンのコントローラーを振り回しながら、由奈が言った。

「匂つてぶよぶよ弱いよねえ・・・。」

由奈がせせら笑い言う。

「テトリスにしようかな。」

「ああ、ごめんなさい！テトリスだけは勘弁して！」

どうやら由奈はテトリスが苦手なようだ。

「てゆか、ヤス。またボンボン読んでの？」

寝転がりながらボンボンコミックスを読んでいるヤスに由奈は言った。

「何回読んでもボンボンは飽きねえんだよ。コロコロはギャグだけど、ボンボンにはストーリー性があるんだよ。だから・・・あーだこーだ」

ヤスがコミックス誌を語りだした。・・・長くなりそうだ。

「由奈、プレステも64もあるのになんでスーパーファミなの？」

せつちゃんがコロコロコミックを読みながら訊いてきた。その間もヤスは語っている。

「えっええ・・・つと・・・」

「酔うから。」

先に匂が答えてしまった。

「由奈、3Dゲームだと酔うから。」

由奈は恥ずかしそうに顔を隠した。

「ええ！どこらへんが酔うの？」

せつちゃんが不思議そうに訊く。

「全部・・・ドットじゃないとか・・・カメラぐいーんてなるとことか・・・ありえない方向にジャンプするとか・・・」

重症だ。由奈は鬱状態になっている。

「あ・・・そういえば壮太遅いね！」

せつちゃんはわざと話を逸らした。

「たしかに・・・あたし、ちゃんと旬ちでゲーム大会って言ったのに。」

由奈の鬱状態が治った。

「わりい！！遅れた！！！」

噂をすれば、壮太が旬の部屋に入ってきた。

「何してたのよ？！」

「悪かったって！これで勘弁してくれよ。」

「！」

ぼくらの

ヒミツ基地

## 第十一話

「三時間内にクリアしろ！」

「めとろ・・・いど？」

壮太が取り出したのはスーパーファミコン用のゲームソフト『スーパーメトロイド』だった。

「さつき、うちにお客さんが来て、もらったんだ。パチンコの景品だつてさ。」

「このキャラクター、スマブラに出てたやつじゃない？」

パッケージのイラストを指しながらせつちゃんが言った。

「これ、友達がやってた。三時間内にクリアするとなんかいいことあったような気がする。」

旬はこのゲームをみたことあるらしい。

「今日は休日だし、今からプレイしても6時までには時間あるからさっそくやりましようよ。」

由奈はゲームカセットをスーパーファミコンに挿して電源を入れた。

重々しい音と暗い配色のドット絵がどことなく怖さを引き出させている。

一人用なので順番を決めて交代しつつやることにした。

「あのプテラノドンみたいな敵かつこいい!!」

「早くしないとタイムリミットが・・・!!」

「そこ!そこ!隠し通路あるじゃん!!」

「像が動いた怖い!!」

「スーツゲツト!!コレで暑いところもへっちゃら!」

「壮太、そんなにミサイル使ったらなくなる!!」

こんな会話をしながら、三時間が過ぎようとしていた。

「やっとクリア!!タイムどれくらい掛かった?」

「えゝ・・・と二時間五十八分。」

壮太が訊くと、ヤスが答えた。

「んじゃ!エンディング終わったら何か起こるの?」

「そろそろエンディング終わるよ!」

みんな画面に食い付いた。

画面にスーツ姿のサムスが出てきたと思ったら、ポニーテールの女の人が出てきた。

「うそ!!サムス女だったの?!」

由奈はかなりのショックを受けている。

「由奈、そんなに落ち込むほどのことじゃ・・・。」

さりげなくせつちゃんに言われてしまった。

「それにしても、匂って結構こうゆうゲーム上手かったんだあ!!」

由奈が匂に後ろから飛びついた。

「・・・まあね。」

旬は照れくさそうに言った。

「・・・・・・・・。」

「壮太、どした？」

「え、あ・・・いや、ポニーテールって案外かわいいもんだな  
と思っで・・・。」

壮太はせっちゃんに言われ、とっさに言った。

「んじゃ、次はカービィやろう!!」

「ええ！まだゲームやんの？」

「あたりまえよ！そのためのゲーム大会だもん!!」

張り切っている由奈の様子を見ると、きつと日が暮れるまでやる  
つもりだ。



## 第十二話 「喧嘩」

「そつうたあゝ 誰でしょう？」

由奈が学校のプール帰りの壮太を後ろから目隠しした。

「うわっ！手、放せ！！」

「誰か当てられたら放してあげるわよ。」

「いちいちめんどくさいやつだなあ。」

壮太は目隠しされたまま歩き出してしまった。

「あ！ちよつと、歩き出したら危ないって！」

といいながらも手を放そうとしない由奈。

ぼくらの

ヒミツ基地

喧嘩」

十二話 「

「由奈があーするからこーなったんじゃん！」

「壮太があーしなければよかったんじゃない！！」

「なにやってんの？」

壮太と由奈が口論している中に、匂たちが入ってきた。

「基地にこないから心配してきたら喧嘩してたのかよ。」

ヤスの呆れ顔を浮かべた。

「由奈が悪いんだぞ！目隠しするから電柱にぶつかって・・・見るよ、このたんこぶ！！」

壮太は頭にできたたんこぶを見せつけた。

「それについては謝ったじゃない！なのにまだ言うなんて最低！  
！大体、壮太が歩き出したせいもあるじゃない！」

二人とも背を向けている。

「もうあたし帰る!!」

頬を膨らませながら由奈が言った。

「そうだ! 帰れ帰れ!! んでもう来んな!!」

背を向けて歩き出す由奈に壮太はあかんべをした。

コンコンッ

「…………由奈?」

ドアを開けて由奈の部屋に入ってきたのは旬だった。由奈はそのとき髪を梳いていた。

「旬、ちよつと髪結ぶの手伝ってくれる?」

「…………いいけど。」

旬は由奈の後ろに立ち、ヘアブラシを手にした。

「ねえ、由奈?」

「なに?」

「壮太のこと好きでしょ?」

「はあ?! な、ナンデアタシガ…………」

由奈の顔が噴火したみたいに真っ赤だ。しかも話し方が片言だ。

「…………やっぱり。」

「そ! そんなことよりさつさと結びなさいよ!!」

「はいはい…………」

「あ…………」

秘密基地の前には、壮太一人ぽつんと立っていた。

「あ…………え…つと…………」

話しかけづらい。

「由奈、その髪型どした?」

壮太は至って普通に話しかけてきた。

「これ？・・・たまにはポニーテールもいいかなあって。」

「似合わない。」

きっぱり言われてしまった。

「なっ！！せつかくあんたのためにやってあげたのに！！」

「だれもしてくれなんて頼んでねえよ！！・・・つか・・・」

┐

壮太は由奈の後に手を廻し、結んでいた髪を解いた。

「おまえはこっちの方がぜってえかわいい。」

「・・・。。壮太・・・顔真つ赤だよ？」

壮太は慌てて顔を隠した。

「さっきの壮太の顔また見たい。ねえ、見さしてよ？ねえねえ？」

「しつこい！見てくんバカ！！」

「いいじゃん、見るだけだからさ！」

顔を必死に隠す壮太に由奈は見ようと下から覗いたりしている。

## 第十三話 「ヒマワリ」

「今日、誰も基地に来なかったし。」

小石を蹴飛ばしながら壮太が日の強い午後の道を歩いている。

「ん！由奈~~~~~！！」

遠くに由奈の姿を発見し、壮太は思いっきり手を振った。

ぼくらの

ヒミツ基地

ヒマワリ」

十三話 「

「壮太、丁度よかった。・・・てゆか大丈夫？」

息を切らして走ってきた壮太を由奈は心配した。

「大丈夫だ・・・って。んで丁度いいって・・・なにが？」

壮太が顔を上げた。

「これ！」

由奈の手には両手いっぱい向日葵が摘まれていた。

「学校の裏の畑にいるおじいさんにもらったの！毎年くれるんだよ」

由奈は上機嫌で話す。

「・・・んで？」

「だから、半分持つてほしいの！」

「ええ〜、めんどくさ・・・。」

「ほら、さつさと持つー！！」

由奈は強引に壮太に向日葵を半分持たせた。

「壮太って将来の夢あるの？」

ひたすら一步道を歩いている最中、由奈が唐突に訊いてきた。

「んゝ・・・ミュージシャンかな。」

「うそ?! 冗談でしょ?」

由奈が笑いをこらえるように手で口を塞いでいる。

「意外に俺、歌作るのがうまいんだぞ!」

「リコーダーもましに吹けないじゃない。」

「そのうちギターが弾けるようになるからいいんだよ!!」

壮太はすっかりからかわれている。

「そーゆー由奈はどうなんだよ? 将来の夢あるのか?」

「・・・あたしはないかも。できるならこのままがいい・・・かな。」

「ええっ! じゃあ、おまえ大人になりたくねえの?」

「そういう意味じゃなくって・・・。」

「んじゃ、どーゆー意味?」

「だから、こういう状況。」

「どーゆー状況?」

「あゝもう、だから、こーゆー状況!」

「だから、どーゆー状況だよ?!」

そんな話をしながら二人は帰り道を歩いていった。

「それじゃ、またあしたね。・・・あ、そうだ。その向日葵、壮太にあげるわ。」

「くれんの? マジで?!」

「運んだのは壮太だもん。それにたくさんあっても飾る場所ないもの。」

「サンキュー!!! んじゃ、またあしたな!」

壮太は嬉しそうに向日葵を抱えて帰っていった。

「壮太、喜んでたけど、ちゃんと向日葵の世話してるかしら・・・？」

テーブルに置かれた花瓶から一輪の向日葵を取り出し、由奈が呟いた。

カチャッ

ドアの開く音が聞こえた。

「パパ、おかえりなさい！」

由奈は走って玄関まで迎えに行った。

「今日、たくさん向日葵もらったん・・・！」

由奈の手から一輪の向日葵は儚く落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1863f/>

---

ぼくらの ヒミツ基地

2010年10月9日16時56分発行